

2016 年 10 月 12 日 数理社会学会機関誌『理論と方法』  
オーガナイザ 小林盾編集委員長、七條達弘編集委員

## 数理社会学会機関誌『理論と方法』で 「21 世紀の社会学が解くべき問題」を募集します

### 【目的】

21 世紀に入り社会がますます多様化するなか、我われが共同してアタックすべき「大きな問題」とはなんでしょうか。『理論と方法』では 1995 年に「数理社会学者の解くべき問題」を公募し、2006 年に「計量社会学の発展とその課題」「数理社会学の発展とその課題」の 2 つの特集を組みました。一方、ボナシッチは 2012 年に、『数理社会学入門』のなかで以下の 6 つの「数理社会学が解くべき問題」を提案しました。

1 同類に影響された行動と、単なる集団行動は、どう区別できるのか。2 集団が二極分化し敵対することがあるのは、なぜか。3 社会的ネットワークは、どのように形成され変化するのか。4 フリーライダーは、どうすれば抑制できるのか。5 複数ある中心性の測定方法に、どのように優劣をつければよいのか。6 人間集団の予測が難しいのは、人間が複雑だからなのか、無秩序だからなのか。

そこで、現編集委員会では、学会創設 30 周年を記念し、新たに「21 世紀の社会学が解くべき問題」を募集します。今回は、数理社会学、計量社会学に限定せず、広く「社会学一般」を対象とします。21 世紀社会学の「羅針盤」となることを企図しています。たとえば、以下のようなものが想定できるでしょう。

- ボナシッチのような理論的課題
- 「因果関係を特定することは可能なのか」「ミクロ・マクロ・リンクより適切な枠組みはあるのか」といった方法論的課題
- 「なぜ結婚するのか」「なぜテロが起こるのか」といった身近でありながら、社会的に深い意義を含む実証的課題

「なぜ～?」「どのように～?」のような疑問形で提案してください。素朴な疑問、社会学の前提を問いなおすようなものでも結構です。若手研究者も臆することなく、皆様からの積極的な応募をお待ちしています。

### 【募集要項】

- 募集期間：2016 年 12/1～12/31。
- 応募資格：会員、非会員どちらでも可。連名可。一人で複数の問題を提案する場合は 3 問程度まで。
- 募集内容：21 世紀の社会学が解くべき問題とその説明。通常のリサーチ・クエスチョンよりは広い射程を含み、その問題を端緒に他の課題へと発展するようなもの。1995 年、2006 年、ボナシッチのものと類似しても可。
- 応募方法：メールのタイトルを「解くべき問題応募」とし、以下を tokubekiboshu@gmail.com に送付。  
(1) 氏名、所属。(2) 問題（疑問形で、100 字程度以内）。(3) 説明（背景、現状、解明する意義、未解明の問題点など、400 字程度、多くても少なくても可、図表は 1 点まで可、専門外の人にも分かりやすい表現で）。(4) キーワード 1～3 個（必須ではない、公表されない）。(5) 公表時に匿名を希望するか。

### 【応募後の流れ】

必要ならオーガナイザが選別をし、『理論と方法』32 巻 1 号（2017 年 3 月刊行予定）に提案者の氏名とともに発表します（匿名可）。オーガナイザから補足や修正を求める場合があります。

2017 年 3 月大会で、今回の応募内容をもとに「ミニ・シンポジウム」が開催される予定です。応募者のなかから数名に登壇してもらい、会員と広く問題を共有する場とします。登壇者の選択はオーガナイザが行ないます。